工ト5M68
327-523

文學士 伊波普猷著

琉球史の趨勢 全

那覇 小澤博愛堂發兌

文學士 伊波普猷著

琉球史の趨勢 全

那覇 小澤博愛堂發兌

44. 7. 26

この小冊子を沖縄の
教育家諸君にさゝぐ

琉球史の趨勢

文學士　伊波普猷

この一篇は明治四十年八月十日沖縄縣教育會の席上で述べた「鄉土史に就いての卑見」と題する演說の草稿に多少の訂正を加へたものである。

私は今日琉球に就いて、鄙見を述べ度いと存じます。すなはち琉球の代表的人物が自國の歷史に就いて如何なる考へを懷いてゐたかといふことをお話致さうと存じます。一體世の大方の人は琉球史上特殊の時代の人民がはたらき又考へた結果を見て直ちに琉球史を一貫せる精神を捕へようとする傾きがありますが、これは餘り宜しくない態度であります。慶長十四年の琉球入とか明治十二年の廢藩置縣とかいふやうな社會の秩序の甚しく亂れた時代にはいつも感情が働き過ぎる故、一般の人民は正當に時勢を解釋することの出來ないものであるが、偉大なる人物は如何なる時代にもその理性を失はないで、正當に時勢を解釋し、且つ衆愚を

誘導して、之に處する道を知らしむるのでありますから、吾人はかゝる人物の考へやはたらきによつて、沖繩人の眞面目なる所を知らなければなりませぬ。今こゝに向象賢（シヨウシヨウケン）や蔡温（サイオン）や宜灣（ギワン）朝保の如き琉球の代表的人物を紹介するに先ちて、沖繩人が他府縣人と祖先を同じうすると云ふことを述べる必要がありますが、これはかつて新聞や雜誌に書いたこともあるから、こゝでは申上げませぬ（拙著『琉球人種論』參照）兎に角今日の沖繩人は紀元前に九州の一部から南島に殖民した者の子孫であるといふこと丈けを承知して貰ひたい。さてこの上古の殖民地人は久しく本國との連絡を保つてゐたが、十四世紀の頃に至つて、本國の方では南北朝の戰亂があり、自分の方でも三山の戰亂があつたので本國との連絡は全く斷絶して了つたのであります。この時に當つて沖繩人は支那大陸に通じて臣を朱明に稱し盛に其制度文物を輸入したのであります。當時の沖繩人はやがて支那人に扮したる日本人であつたのである。十五世紀の頃に至つて沖繩島に尙巴志といふ英傑が起つて三山を一統した時に、久しく斷絶してゐた本國との連絡は回復せられ、日本及び支那の思潮は滔々として沖繩に入り、十六世紀の初葉に至つて沖繩人は日本及び支那の文明を消化して沖繩的文化を發輝させたのである。是れ即ち尙眞王が中央集權を行つた時代である。沖繩の萬葉ともいふべきオモロが盛に歌はれたのもこの時代である沖繩語を以て金石文や消息文を書いたのもこの時代である。而してこの精神は遂に發して南洋との貿易となり、山原船（ヤンバル）は遙にスマトラの東岸まで航行して葡萄牙の冒險家ピントを驚かしたのである。沖繩人はこの時代に於て既に業に勇敢なる大和民族として恥かしく無い丈けの資格をあらはしたのであります。所が兩帝國の間に介在するの悲しさ、沖繩人は充分にその本領を發輝する事が出來ないで、漸く機械として取扱はれるやうになつたのであるゞなはち島津氏は沖繩の位地を利用して當時鎖國の時代であつたに拘はらず、沖繩の手を通うして支那貿易を營んだのでありますが、しかしながら此頃薩摩と琉球との關係は至つて散漫なる者であつたが豐太閤が朝鮮半島に用ゐた勢力の餘波は間もなく慶長十四年の琉球征伐となつてあらはれました。是れやがて薩摩と琉球の經濟的關係を一變して政治的關係となすの關節である。爾來征服者たる薩州人は被征服者たる沖繩人を同胞視しないで奴隷視するやうになりました。さて沖繩の方では古來國子監や

福建あたりで學んで歸つた久米村人が支那思想の代表者で、鹿兒島で學んで歸つた留學僧の連中が日本思想の代表者であつたが、慶長の頃に至つては此の儒者と此僧侶とが銘々の職業を離れて政治の劈を容れるやうになつてゐたのであります。慶長十四年の琉球征伐は畢竟二思想最初の大衝突に過ぎないのであります。かういふ場合に天下の大勢に通じて自國の立場を知る經世家があつて、能くこの二思想を調和して民衆を誘導していつたならば、かういふ禍を未然に禦ぐことが出來たに相違ないが、惜い哉かういふ人物は當時一人もゐなかつたので御座います。此戰爭の結果、尙寧王以下百餘名は捕虜となつて上國し、如才なき薩摩の政治家は思ふ存分にその主なき琉球を經營致しました。尙寧王は俘囚となつて薩摩に在ること二年餘漸く許されて父母の國に歸つたが、さながら島津氏の殖民地に身を寄する一旅客の樣であつたと申します。しかしながら島津氏は決して琉球王國を破壞する樣なことはしないで、その形式丈けは保存して置いて之を支那貿易の機關に使つたのであります。征服後島津氏が琉球王をして不相變支那皇帝の冊封を受けさせたのもこれが爲です。諸君もし支那の冊封使が渡來する毎に那覇にゐた二三百人の氣の早い薩摩隼人が支那人に見られまいと思つて半年餘の間今歸仁や城間に潜んでゐたといふ事實をお聞きになつたら、思半ばに過ぐることがありませう。沖繩が日本と交通してゐるといふことを隱蔽するといふことは當に沖繩のためであつたのみならず又薩摩のためであつたのであります。沖繩人はかういふ風にして支那に近づき、之によつて得た所の利潤の過半を島津氏に納め、その餘分を以て自立して來たので御座いますが、間もなく支那には明清の大亂が起つて沖繩人は二三十年間も支那に往くことが出來ないやうになりました。これは實に沖繩に取つては苦痛であつたのみならず島津氏に取つても亦苦痛でありました。この時代のことを俗にフタカチヤの御代と稱へてゐます。沖繩人はこの時支那に使節に遣られるのを非常に嫌つたとのことであります。この時代の沖繩人の頭には支那といふ考へが薄らいで來て、日本といふ考へが強くなつて來たのでありませう、丁度日清戰役頃の沖繩のやうに。兎に角沖繩が薩摩に對する惡感情は漸く和いで參りましたが、經濟上の困難は一層增して參りました。この時の有樣及びかういふ時に處する道を蔡温はその『獨物語』の中に、

唐世替(革命)程の兵亂差起り候はゞ進貢船差遣候儀不罷成或は十四五年或は二十年三十年も渡唐絶行仕儀案中に候御當國さへ能々入精本法を以て相治置き候はゞ至其時國中衣食並諸用事無不足相達尤御國元(薩摩)への進上物は琉物計にて致調達其御斷申上可相濟積に候若御政道其本法にて無之我々之氣量才辨迄を以相治候はゞ國中漸々及衰微御藏方も必至と致當迫候儀決定之事に候右之時節渡唐斷絶候はゞ御國元へ進上物の儀琉物調も不罷成言語道斷之仕合可致出來候

と言つてゐます。沖繩の立場は實に苦しい立場であつたのであります。

沖繩の立場が以上申述べた通りでありましたから、沖繩人に取つては支那大陸で何人が君臨してもかまはなかつたのであります。後世靖南王が叛した時の如き琉球の使節は清帝及び靖南王に奉る二通りの上表文を持參していつたとのことであります。又不斷でも琉球の使節は琉球國王の印を捺した白紙を持參してゐていざ鎌倉といふ時どちらにでも融通のきく樣にしたとのことです。此紙のことを空道と申します。沖繩人の境遇は大義名分を口にするのを許さなかつたのである。

沖繩人は生きんが爲めには如何なる恥辱をも忍んだのである。一食を與ふる者は我主也」といふ俚諺もかういふ所から出たのであらうと思ひます。誰が何と云つても沖繩人は死なない限りは自ら此境遇を脱することが出來なかつたのであります。これが廢藩置縣に至るまでの沖繩人の運命でありました。所が明朝が亡んで清朝が興りましたので、沖繩は暫くの間名實共に日本に屬するやうになりましたが、島津氏の方でも琉球を如何に取扱つて可いやらわからなかつたのであります。島津氏の方にも機を見て琉球の兩屬を止めやうと圖つた人もゐたと見えて、十九代の君主光久の如きは正保三年には明國が政を失して戰亂が止むことのないのを聞いて、此際意を決して沖繩を處分せむことを幕府に諮つたことがありました。又明暦元年には愛親覺羅氏が支那一統の餘威を以て新に使節を沖繩に派遣するといふ噂を聞いて、沖繩をして清國との關係を開くやうなことの無い樣にさせて貰ひ度いと幕府に願うたこともありました。もし此時島津氏の建議が採用されてゐたら、沖繩は二百年前に支那との關係を絶つてゐたのでありませう、しかしながら德川氏の平和政策は此新興の強國と國交を開くことを恐れて斷然たる措置に出づ

ることが出來なかつたのであります。沖繩は依然として清朝の冊封を受けて其正朔を奉ずる樣になりました。こゝで諸君は日清戰爭の頃まで清國を慕うてゐた所の久米村人が此時どんな態度を取つてゐたかといふことを問はれるでありませう、王代紀といふちよつとした本によれば、彼等は寛文の頃まで大明の衣冠をつけてゐたが、寛文三年清國の使が琉球に來た時、斷然片髮を結んで國俗に順つたといふことであります。彼等は實にその母國朱明の滅亡を嘆きつゝあつたので御座います。以上御話申上げたことで日支兩國間に於ける沖繩の位置はおわかりになつたらうと思ひます。これから本論に這つて向象賢や蔡温や宜灣朝保がこの間に處していかに考へ、又はたらいたかといふことをお話いたさうと存じます。

明國の滅亡後暫らくの間島津氏が琉球の處置に困つてゐたことは前に申述べた通りであるが、琉球自身は尙更自身の處置に窮してゐたので御座います。當時具志川玉子尙亨といふ賢相があつて政治を執つてゐましたが、餘程の道德家で時の人は之を聖人と稱へてゐました。或時罪人が死刑の宣告を受けたところで、尙亨聖人もこのことを知つて居られるかと問うた。聖人はとうに知つて居られるとの答へを聞て、罪人は安心して刑に觸れたといふことがあります。尙亨は此通り偉い人でありましたが、當時の琉球をどう處置して可いやらわからなかつたのであります。或時小さい男の兒が乳母に抱かれて京太郎の舞を見てゐたが、尙亨がつくづくとこの兒の瞳を視ていふには、私は未だ嘗つてこんなに器量の優れた兒を見たことがない、後日私に繼いで政柄を執り、琉球に金の輪をはめるのはこの兒であらうといつたとのことで御座いますが、この寧馨兒こそは他日薩州と琉球とを融和させた所の羽地按司向象賢であります。此話は決して通常の作り話としてきゝ流してはなりませぬ、この中には尙亨がいたく沖繩の將來を氣遣つて誰ぞ自分より偉い政治家が出でゝ時勢を解釋して呉れゝば可いがと願つた心が能く現はれてゐます。向象賢は果して沖繩に金の輪をはめました。彼れは國相となる三年前、即ち慶安三年、はじめて沖繩の正史中山世鑑を編纂して自國の歷史を敎え國相となつてから「仕置」を出して其の政見を述べました。「仕置」は實に後世爲政者の金科玉條として遵守する所のものであります。向象賢はその劈頭第一に、先づ國相具志川按司の跡役に就いて大和に伺つたら、自分に仰付けられたといふことを書いてゐます。今この

書を通讀して向象賢の眞意のある所を見ると、頻りに「大和の御手内に相成以後四五十年以來如何樣御座候而國中致衰微候哉」と嘆じ、島津氏に征服されて後は、士族が自暴自棄になつて、酒色に耽り、社會の秩序がいたく亂れたのをこぼしてゐますさうして彼は之を救ふには經濟上や其他の事に於て常に消極的の手段を用ゐ、又薩州と琉球との間に精神上の連絡を付けることを得策と思ひました。諸君は言語の比較から日本人と琉球人とが同一の人種であるとの說を始て稱へた人を言語學者チエムブレン氏と聞て居られるかも知らぬが、之はチエムブレン氏ではなくて、吾が向象賢氏であると心得て貰ひ度のであります。向象賢は例の「仕置」の中に

竊惟者此國人生初者日本より爲渡儀疑無御座候然者末世之今に天地山川五形五倫鳥獸草木之名に至る迄皆通達せり雖然言葉の餘相違者遠國之上久敗通融爲絶故也五穀も人同時日本より爲渡物なれば云々。

と書いてあります。當時沖繩人が薩摩に對して惡感情を有つて居た時に向象賢は日琉人種同系論を唱へたのであります。これは兎に角二者の感情を融和したのでありませう。向象賢は又「仕置」の中に以後士族として學文算勘筆法謠。醫道庖丁馬。乘。方。唐樂筆道茶。道。立花。等の中何か一つ嗜んでゐない者はどんなに身分の良い者でも官吏に採用しないぞと書いて居ます。謠や茶の湯や生花のやうな日本の藝術を奬勵した所などは餘程面白い所であります。謠をうたひ、花をいけ、茶をのんでゐる間に、沖繩人は大和心になつて了つたのであります。これまでは薩州と琉球との關係は經濟的政治的でありましたが、こゝに至つて一歩進んで精神的となりました。彼れは又或時三司官に敎書を示して、

右七ヶ年の間夜白晝精相勤候付國中之仕置大方相調百姓至迄富貴に罷成候儀乍憚非獨力哉と存候依之根氣疲果候且復老衰極致勤仕時節到參候斷申候憐愍被思召赦免可被下候左候而二三年も存命候はゞ本望不可過之と存候縱十年二十年勤候人も僅此中之七ヶ年は不可勝候頃日內證より右斷之段申上候處先以被召留候返事被下候此趣を以宜敷樣願存候以上

と申しました。實に自信の强い言ひ方であります。この「仕置」を讀んで行くとこの獻身的の政治家が七ヶ年の間に制度を改め政綱を張り農勢を起し山林を開き島津氏の征伐後の財政を整理するに人並ならぬ働きをなしたことが能くわかります。

（附錄四十二頁參照）かれは殘りの三ヶ年は專ら敎化事業に力を致したのでありま
す。仕置の結尾の所には、

右之仕置大方に候而御國元より國之下知未斷之故國俗壞行候儀役人之曲事と
被仰付候はゞ我々可及迷惑候間前以申出候若恨に被存人は羽地合手に可成候
少も一身惜不申候國の恥辱には出間敷候如何樣返答可承候

と書いてあります。千鉤の重みのある所です。彼れは實に尙亨が豫言した通り、沖繩
に金の輪をはめて延寶三年（西曆一六七三）に此の世を辭しました。而して他日此基
礎の上に近代の沖繩を建設すべき蔡温はまだ母の胎內にも宿らなかつた。蔡温は
彼れの死後七年にして呱々の聲を擧げました。

すべて社會の事はその方針を定めるのが六ヶしい、その方針さへ定まれば、格別
間違つたことをしなければ、自ら時勢が導いてくれるので御座います。向象賢死後
の沖繩はトン〳〵拍子で向象賢が指定した方向へ進んだので御座います。向象賢
の死後日本との交通は頗る頻繁となり、王子や貴族の年毎に薩摩や江戸に出かけ
るのが多くなり、支那との往來も昔のやうに續けられて、親方や官生の支那に遊ぶ

のも少くはなかつた。さうして當時沖繩人が朝聘觀風する所の兩國を見るに、一方
は八代將軍幕府中興の時にして、他方は淸の聖祖が兵亂を平げて文學を奬勵する
の秋であつた。就中江戸及び北京の文運が將に花を開かうとした頃には、自家も亦
古今未曾有の黃金時代に到達してゐたので御座います。これやがて兩國の文明が
海南の小王國に於て相調和したのである、沖繩ではこの時程澤山の人物を出した
例はありませぬ。沖繩で古今獨步の政治家と呼ばるゝ具志頭親方蔡温も、沖繩で儒
學を盛にした名護親方程順則も、沖繩ではじめて劇詩を作つた玉城親雲上向受祐
（朝薰）も、苦の下若草物語、萬歲貧家記、雨夜物語等を物した平敷屋朝敏も、仲島のよし
や、思納なべ等の女詩人も、この時代に輩出致しました。久米村の方にも無數の漢詩
人が輩出致しました。思納なべが

波の聲もとまれ風の聲もとまれ首里天加耶志みおんき拜ま

と謳歌した時代は卽ちこの時代であります。而して蔡温は實にこの時代を代表す
る所の偉大なる人物であります。彼れは島津氏の琉球征伐の時犧牲になつた支那
思想の權化若那親方鄭迥の產地久米村に呱々の聲を擧げた者で、明の洪武年間支

那思想を齎らして沖繩に歸化した所謂三十六姓中の門閥宋の蔡襄が子孫であります。政治的天才を有してゐたので、格外から拔擢されて三司官（大臣）になつた者であります。彼れは向象賢とは別で、支那系統の人で、而も若い時支那で學んだ人であるが、彼れは活眼なる、夙に沖繩の立場を洞察して向象賢の政見を布衍してゐます。

彼れの自叙傳を讀んでみると、如何に彼れが活學問をしたかといふことがわかります、彼は二十七歳の時に進貢（ツンコン）存留役を仰付けられて福州に渡り二十九歳の時に國へ歸つたのでありますが、その間に或隱者（多分陽明學者であつたでせう）に會つて、心機一轉したのであります。彼れは隱者から、文章はどんなに上手に綴つても、書物はいくら澤山讀んでも、それは藝人同樣で學問とは違ふ、幸君はまだ若いから、一生懸命に學問をしたら、一身の爲は申すに及ばず君の爲國の爲になる、四書五經や其外賢傳の書は何れも誠意治國の事を述べたのである、然るに君は誠意治國の大主旨はそつちのけにして道樂半分に書物を讀み、文章を綴つてゐる、これ畢竟身を忘れ國を忘れる仕業で、藝人よりも遙に劣等だ……君がいくら書物を讀んだといつて、それは文字の糟粕を嘗めた迄で其内の眞味を味はつたのではない云々」といふ言を聞いて夢の醒めた樣に自覺したのであります。一度自覺して、見ると彼れの目に始めて彼したのはその母國琉球の憐れなる境遇であつたのであります。世に醉生夢死の同胞の眞中に獨り醒めてゐる人程寂寥を感ずる者はありますまい、蔡温は旅寢の空に幾度かかゝる悲哀を感じたのでありませう。彼れはかゝる時父母の國を救ふべき責任を一層強く感じたのでありませう。彼は常に或問題（多分琉球を如何にして經營すべき乎といふ問題）を念頭を置いて、あらゆる本を讀み、あらゆる事物に對したのであるから、あらゆる知識は能く消化されて、彼れの頭腦は多角的となつたのである、又支那滯留中一切經さへも讀破したといつてゐる。かゝる種類の人は時勢の解釋者として最もふさはしい人であります。私は彼れの自叙傳を讀んで始めて三四十年間の彼れの活動の偶然でないことがわかりました。諸君がもし彼れが書いた「獨物語」や「敎條」を繙かれたら、その注意の永遠に渉り、その政略の適切なる、眞に琉球第一の政治家として、又或意味に於て一個の外交家として、民衆を誘導し、敎訓し、沖繩群島の住民を可憐なる狀態から救うたといふことがおわかりになりませう。彼れは向象賢よりもヨリ大なる時勢の解釋者でありまし

た。彼れは時勢の謳歌者ではなくて寧ろ時勢の作爲者でありました。向象賢は沖繩を經濟的に救つて、更に沖繩人の向ふべき方針を暗示致しましたが、人間實理實用之道有形無形共其秘旨を授けられた蔡溫は向象賢が造つた餘裕を利用して、沖繩人をしてたゝ租稅を拂うて生るといふ外に、更に人間としてなさなければならぬ事が澤山あるといふ事を敎えました。彼れの「獨物語」は向象賢の「仕置」をまねて書いたものと思はれるが、その中に自國の立場についての考へを露骨に言ひあらはしてゐます。

毎年御國元(薩摩)へ年貢米差上候儀御當國大分御損亡の樣に相見得候得共畢竟御當國大分の御得に相成候次第誠以難盡筆紙譯有之候往古者御當國之儀政道も然々不相立農民も耕作方致油斷物每不自由何篇氣儘之風俗段々惡敗剩世替(革命)之騷動も度々有之萬民困窮之仕合言語道斷に候處御國元之御下知に相隨候以來風俗引直農民も耕作方我增入精國中物每思儘に相達今更目出度御世に相成候儀畢竟御國元之御蔭を以件之仕合筆紙難盡御厚恩と可奉存候此段は御敎條にも委細記置申候

實に其通りであります。蔡溫は島津氏の許す範圍內に於て、支那の制度文物を輸入して三十六島の人民を敎化し、理想的の國を建設するといふ考へを懷いて居りました。彼れは實際この兩大國の間に介在して出來る丈けのことはなしたので御座います。しかしながら彼れが「獨物語」中に

往古之聖人も政道之儀は夜白(よるひる)入精候愼縱(たとへ)令は朽手繩にて馬を馳せ候儀同斷と被申置候

といつた通り、琉球政治家の苦心は一通りではなかつたのであります。蔡溫は又「獨物語」の中に國家を上中下の三段に分ち、その各をまた上中下の三段に分ち、都合國家に九段の別があるといふことをいつて居ります。そして下國之下段であつても政治其宜しきを得たならば、それ相應に安堵之治が出來る、といつて暗に琉球の樣なひどい處にもやりやうによつては、理想國が實現せられるといふことをほのめかしてゐます。世界氣の毒な政治家多しと雖球琉の政治家程氣の毒な政治家はゐないかと存じます。戰々兢々として薄氷を踏むが如しといふ語は能く琉球政治家の心事を形容することが出來ます。しかしながら獨り蔡溫は其生涯中少しも困つ

たといふ風な態度をあらはしたことはなかつたのであります。このことは彼れの自敍傳を讀んでもわかるだらうと思ひます。こゝが蔡溫の偉大なる所で御座います。

さて蔡溫時代のやうに二個の思想が調和してゐる時分には、一般民衆は動もすれば各其好む方に偏して、自國の日支兩國に對する關係を正當に觀することが出來ないのであります。もし之を自然に任せて置いたならば、兩大國の形勢が一變した曉には、沖繩は再び慶長十四年の時の樣な悲境に陷ることがあるので御座います。蔡溫は早くもこゝに氣がついて、御敎條を發布して沖繩が日支兩國に對する關係の輕重如何を極めて叮嚀に敎へましたが、その眞意を解するものが至つて少く士族の連中は何づれも四書五經ばかりを金科玉條として遵守し、御敎條は百姓の敎科書であるといつて輕蔑するやうになりました。惜しみても猶餘りあることであります。(この御敎條を見て薩州人も大に安心をしたとの話がある)。それから蔡溫は「獨物語」の中に

國土之儀眼前之小計得にては絶て安堵之治罷成不申積に候依之政道と申は必國土長久之御爲に大計得を第一に心掛相働申由聖人被敎置候

といつて行末のことまで考へてゐたのであります。實際彼れはゆく〳〵は琉球は全く支那の手を離れて、專ら日本に屬するやうになるだらうといふことをほのめかしてゐます。勿論この事は記錄にも何にも書いてありませぬが蔡溫が尙敬王に申上げた忠告として尙敬王以來口々に傳へられて今日に至つたのであります。それはかうである。

支那との事はさう六ヶしくはありませぬ、よし六ヶしい事がおこつても久米村人丈けでとりなしが出來ます、しかし日本との事はさうは參りませぬ、他日一片の書狀で國王の位を失はなければならぬことがあるとしたら、それは日本の方から出るのでありませう。

とのことであります。これは明治十二年に首里城を御立退の時分、尙泰王が安里氏に話されたとのことであります。これは安里氏が那覇尋常高等小學校の訓導富名腰氏を通じて私に告げられたことであります。決して嘘でないと云ふことを誓つて置きます。蔡溫はあゝいふ泰平の時代に能くもかういふことを豫期したゐたの

であります。よしや此話がないとしても「獨物語」を熟讀された方にはかういふことはとうに蔡温は考へてゐたらうといふことを推察されませう。蔡温は「獨物語」や「教條」に爲政者の執るべき方針を規定して置きましたがなほ平常の事務に關しても細しく記載して置いてその死後どんな人が三司官になつても之を繙きさへすれば、どんな時でもまごつくことのないやうにしたとのことです。さうでありますから琉球最後の政治家宜灣朝保氏は蔡温以後は四人の三司官がゐるといはれたとのことです。實際三司官は三人しかゐないが死んだ蔡温がいつも三司官と一緒にゐて、政治を執つてゐるやうなものだといふ意であるさうです。蔡温は實に好個の知己を得たといはなければなりませぬさうして宜灣朝保の出現も亦偶然ではなかつたのであります。星移り物變り、世は御維新となりました。即ち日本人は國民的統一をなすべき機運の到來を自覺するやうになりました。この時にあたつて沖繩人の心中に當然起らなければならぬ疑問は自國の運命はどうなるであらうかといふ事であつたに相違ありませぬ。ところが沖繩人はこの大問題に就いて至つて無頓着であつたのであります。前にも申上げた通り所謂琉球王國は慶長十四年以後は日本の一諸侯島津氏が故更に名に於ては支那に屬せしめ實に於ては日本に屬せしめて私かに支那貿易を營む爲に存在させた機關に過ぎないのであるからその存在の條件がなくなるや否や動搖を來すのは當然のことで御座います。御維新になつた結果琉球は最早島津氏の機關でないやうになつて、當然日本帝國の一部分たるべき性質の者となりましたので、とう〳〵琉球處分といふことが起つて參りました。沖繩人に取つては寢耳に水であつたので御座います。これやがて日本思想と支那思想との最後の大衝突である。斯る時に際し、人は往々にして大勢の推移を知らず、前後を同一の時代と觀ずることがある。こゝに於てか人と時勢と相副はず、その間に扞格を來すのである。これ社會に保守黨の起る所以である。これ社會に擾亂の避くべからざる所以である。宜灣朝保は此間に立つて時勢を解釋し、輿論を無視して沖繩を今日の樣な位地に置いたので御座います。而して彼れは非常なる迫害を受け、明治九年憂を懷いて死にました。彼れは實に不幸なる政治家であります。しかしながら彼れは幕末の勝安房や朝鮮の李完用と並稱せらるべき大人物であります。

つら〳〵琉球史の趨勢を見るに、向象賢や蔡溫や宜灣朝保の案内するが儘に、歩一歩安全なる世界の大勢といふ潮流に向つて進んだので御座います。而して私共はこの大海のたゞ中の甲板上に立つて、私共を出口まで引張つて來た所の三人の恩人を顧みて、轉た感謝の念を燒にせざるを得ないのであります。かつて向象賢や蔡溫や宜灣朝保と共に窮屈千萬なる天地に住んでゐた所の沖繩人は、今や天空海濶なる世界に住むやうになりました。さうして政治的壓迫を取去られた所の沖繩人は三人者が言はんと欲して言ふ能はざりし所を言ひ、爲さんと欲して爲す能はざりし事を爲し得るやうになりました。しかしながら沖繩人がかういふ所に到達する迄には幾多の困難に遭遇したといふことを知らなければなりませぬ。この苦しい經驗も亦沖繩發展の一要素になつてゐるに相違ありませぬ。それはさておき世界の大勢日本の革命琉球の弊政は皆琉球の處分を容易ならしめた所のものでありますが、向象賢や蔡溫が作つた琉球史の趨勢は一入之を容易ならしめたのであります。只今奈良原知事も仰しやつた通り、琉球問題は實に能く朝鮮問題に似通つてゐます。これは歴史家のとうに氣がついてゐる所で御座います。恐らくは現今日本の政治家は慶長以來で得た所の經驗で以て朝鮮を經營しつゝあるので御座いませう。朝鮮の今後の琉球成行も大方想像することが出來るので御座います。しかしながら二者は單に形式に於て似てゐるので其實質に於ては大に異なる所のものがあるので御座います。何はさておき人種から言つても、朝鮮人と日本人とは遠い親類の關係でありますが、日本人と琉球人とは一人の母から生れた姉妹の關係であります。(拙著「琉球人種論」參照)島津氏の琉球征伐時代に出來た「喜安日記」といふ本を繙いて見ると、「古老人云唐を祖母の思をなし日本を祖父とせよと云り」といふことがあります。明治初年頃の沖繩人は支那を母とし日本を父としてゐたのであります。二三百年の間に祖父母の關係が父母の關係に變つたのを見ても琉球史の趨勢を見ることが出來ます。琉球處分は實に迷兒を父母の膝下に連れて歸つた樣なものであります。ところが此琉球民族と云ふ迷兒は二千年の間支那海中の島嶼に彷徨してゐたに拘はらず、アイヌやピープルとして存在しないでネーションとして共生したので御座います。彼等は首里を中心として政治的生活を營みました。萬葉集に比較すべきおもろさうしを遺しました。ラッカ海

峽の邊まで出かけました。さうして彼等の北方の同胞がかつて爲さなかつた所の自國語で以て金石文を書くことさへなしました。彼等は實に物質的にはた精神的に國家社會を形成すべき能量を有してゐたので御座います。

さて萬象の進化は不滅なる恆力の効果たる一定の加速度を以てするのであります。琉球民族の進歩が獨りどうしてこの加速度の理法にそむく事が出來ませうか。前時代の制度文物なくして何處に琉球がありませうか。嚴格なる意味に於ての琉球はアマミキヨ以來凡ての人の考へやはたらきが積り積つて出來たのであります。個體の享有する仕事即ち經驗は有限なる個體の生存に殘存し、生殖の連鎖によつて、關鏈する種族の全體に寓して恒久不滅の存在を有するものであります。これやがて遺傳の理法であります。加速度は段々增して來ました。過去に於ける如き抵抗は全く絶滅或は減退致しました。今日以後の沖繩人に向象賢や蔡溫以上の仕事の出來るのは火を睹るよりも明かであります。しかしながら彼等以上の人物たらんとするには彼等が遭遇した以上の困難に遭遇せなければならないかも知れません。私共は私共にかくの如き遺傳を與へてくれた祖先を尊敬しなければなりません。これやがて自分を尊敬するのであります。私は斷言します。沖繩人は過古に於てあれ丈けの仕事位はなしたから、他府縣の同胞と共に廿世紀の活舞臺に立つことが出來るのであります。アイヌを御覽なさい。彼等は吾々沖繩人よりも餘程以前から日本國民の仲間入りをしてゐます。しかしながら諸君、彼等の現狀はどうでありませう。やはりピリプルとして存在してゐるではありませぬか。不相變熊と角力を取つてゐるではありませぬか。彼等は一個の向象賢も一個の蔡溫も有してゐなかつたのであります。周回百里位の小天地にゐたからといつて、蔡溫の如き政治家を內地の一地方の家老位に比較するのは誤りであります。琉球政治家の活動の範圍は北京から江戸の間にひろがつてゐたのであります。而も年百年中大變な難問題にのみ出會しつゝあつたのであります。私は蔡溫の如きは明治以前の各藩のどの政治家よりも遙かに活動してゐたと信じます。もし彼れを檢束してゐた運命の繩をゆるめたならば、彼れは思ふ存分に活動して支那海の一隅に一種のユートピヤを出現せしめたに相違ありませぬ。兎に角彼は沖繩にはもつたいない位な大政治家でありました。私は諸君が虛心平氣に琉球の政治家の苦心の跡を追想せら

れんことを希望いたします。

終りに臨んで私は明治十三年以來日本政府の如何に琉球を社會化(ソシヤライズ)したかといふことを述べ、ついでに教育家諸君に對して私の希望を述べようと思ひます。

沖繩の最近世史は社會學上に於ける所謂社會化(ソシヤリゼーション)の好適例で御座います。社會化と申すのは或社會が個人若くは群の一體若しくは他の社會を化して自個の社會の成分若しくは部分となす事業のことでありまして、その作用が自衛的と他攻的の二つに分れます。前にも申上げた通り沖繩人は日本國の建國以前に南島に分れて來て國を建てた日本人の一支族でありますが、二千年の間に自然變種になつた者であるといふことは誰れしも疑はない所で御座います。さて沖繩の立場が既に申述べた通りでありますから、沖繩人の日本國に對する感情は親しむといふよりは寧ろ畏れるといふことで御座いました。いぢゝめる人をこわいと思ふのは人間自然の情であります。之に反して沖繩人が支那に對する感情は畏れるといふよりは寧ろ親しむといふ方で御座いました。恩をきせる人を親しいと思ふのも亦人間自然の情であります。これ廢藩置縣前に於ける沖繩人の感情をありのまゝにいひあらはしたので御座います。こゝらは日本國民の三省しなければならぬ點と思ひます。かういふ有樣でありましたから沖繩人の親しむといふ感情は凡て直接に彼等を保護し誘導する所の尙家に向つて傾注されたので御座います。此感情が段々つのつて忠義の念となり、遂に世道人心をつなぎとめる繩となつたので御座います。實に明治の初年まで政治及び社交の中心であつた尙家はやがて沖繩全體であつたのであります。所が琉球處分といふ政治的津浪によつて尙家は最早政治の中心でないやうになりましたが、なほ社交の中心ではあつたのであります。社交の中心丈けを維持してゐた所の尙家が自個存立の基礎を搖かし存立の要性を弱むるが如き外來の勢力に對して之に抗拒する所以の方法勢力となるべき自衛的社會化を講じたのは人情として已むを得ざる所であつたので御座います。即ち日本の社會と接觸するに際し個人の流通からして其統一及び鞏固の幾分弱めらるゝを補ふ爲めに一方に於ては沖繩人の內地人に接觸するのを禦ぎ、他方に於ては理想的に舊社會の扶殖宣揚を期せしめ、飽くまでもその數百年來の少朝廷を維持せむと力めたので御座います。御維新の時に日本國內の各藩でさへ國民的統一の事

業に反對して戰つた位でしたから、半ば外國視されてゐた琉球がかういふ反抗をしたのは決して怪むに足らないので御座います。沖繩では血を流さなかつた丈けそれ丈け平やはらかな生まぬるい反抗をつゞけて日清戰爭の頃に至つたので御座います。沖繩人が廢藩置縣の時を流さなかつた理由に就ては「進化論上より觀たる琉球の廢藩置縣」參照。何人も大勢に抗することは出來ぬ。自滅を欲しない人は之に從はねはならぬ。一人日本化し二人日本化し、遂に日清戰爭がかたづく頃にはかつて明治政府を罵つた人々の口から帝國萬歲の聲を聞くやうになりました。大勢に抗した義村按司は命のある限り反抗してとう〳〵福建で死んだ。死んだのみならず頑固黨の首領といふ難有い名を一人で背負つて死にました。これが自衛的社會化の結論であります。それから日本人がこの自衛社會化の繩張り內に這入り込んで如何に他攻的社會化をなしたかといふことを御話いたしませう。他攻的社會化といふのは社會が外に向つて增進的擴大を爲す時に見る所の社會化であつて、これにも積極的と消極的の二通りあります。積極的社會化は通例單に社會化と申して自個以外の社會を化して、自個社會の完全なる部分となす事で御座います。その方法は他社會の衆人と我社會の衆人との間に血緣及び生活狀態の關係を通じ他社會の全部若くは各部を我社會の制度の一部として有機關係を成し社交性を被我の衆人各個の間に普及し併せて彼の調子を我のに開化し我の社會性を彼に及ぼし自然的より意識的に、意識的より理想的に進ましむるに在るので御座います。ところが積極的社會化の直に實行すべき場合は社會的抵抗力の薄弱若くは皆無なる社會を社會化する時のみであつて、多少の發達を成就せる社會を我に化せんとするには、必ず先づ消極的社會化を成すの必要があります。沖繩の如く二千年間隔離して存在し、而も七百年來發達せる國家を形成して、盛に自衛的社會化を講じてゐた所の社會を社會化せんとするに當つて、日本政府が先づ消極的社會化を講じたのは已を得ない次第で御座いました。消極的社會化はやがて國性剝奪であります。日本政府は即ち琉球王國を廢して其國家制度を滅却せしめ、風俗習慣制度等を滅却せしめようとしたのであります。衆人社交性の調子の整一を攪亂させて社交を薄弱ならしめたのであります。その理想的社會性を攻擊して一敗地に塗れしめ意識的社會性を攪亂し、摩痺せしめ、社會性の意識の衆人に存するなきに至らしめ

遂に社會性の自然的存在を滅却させようと力めたので御座います。そこで諸君は倘家が政治上の中心でないやうになつたと同時に、社交上の中心でもないやうにならうとした重なる理由がおわかりになりましたらう。思ふに、今日のやうに理想的に社會性の扶殖宣揚をなすまでの當局の苦心も一通りではなかつたのでありませう。しかしながら沖繩人の心中にも亦之をして一層容易ならしむるものがあつたといふことを忘れてはなりませぬ。これは沖繩の社會的抵抗力が薄弱若くは皆無であつたといふことではありませぬ。社會的抵抗力は強かつたが、化するものと化されるものゝ心中に一致するものゝ存在するといふことがわかつて、急に打解けたのであります。この一致してゐるものは當局者の大に利用すべき所であつたに拘はらず、久しく利用することが出來なかつたのであります。これは當時沖繩の研究が足らなかつた故でありませう。明治五年琉球處分に就いての左印の意見を讀んで見ると、王を華族に列するは斷じて不可也。抑も華族は神別を以てこれに任じ皇室の藩屏たり今琉球人たる琉球王を以て我華族に列すれば國内の人類に附したる等級に他國人を混ずるものなり」と云ふことが御座います。これ皆歴史的に傳はつて

來た感情の遺物であります、私は沖繩人がこの一致してゐる所を大に發輝させるといふことは即沖繩人をして有力なる日本帝國の一成分たらしむる所以のものであらうと存じます。もしもこれまでの隋力で琉球固有の者をかたつぱしからぶちこわさうとする人があつたら、これとりもなほさず、兩民族の間に於ける精神的連鎖を斷切るのであります。歴史を無視するのであります。只今申上げた通り一致してゐる點を發輝させることはもとより必要なことで御座いますが、一致してゐない點を發輝させることも亦必要かも知れませぬ。これは藝術の方面に向はうとする沖繩人に取つては特に必要なることでありませう。一致してゐない點といへば少しく語弊がありますから他人がまねるとの出來ない點といつておきませう。私は何人も他人の到底まねの出來ない特質をもつてゐると思ひます。各人がもつてゐる所の個性は無雙絶倫であります。即ち各人は神意を確實に且つ無雙絶倫なる狀に發現せる者であります。換言すれば各個人はこの宇宙にあつて他人の到底占め得べからざる位置を有し、又他人によつて重複し得らるべからざる狀に神意を發現するものであります。（ロイス氏「世界と個人」參照）此に由つて之を觀れば、天は、沖繩人な

らざる他の人によつては決して自己を發現せざる所を沖繩人によつて發現するのであります。即沖繩人微りせば到底發現し得べからざりし所を沖繩人によつて發現するのであります。個性とは斯くの如きものであります。沖繩人が日本帝國に占むる位置も之によつて定まると存じます。遺傳の理法を考へると、個性はどうしても無くすることの出來ないものであります。もし沖繩人にしてその個性を無くすることが出來る人があたら、これとりもなほさず、精神的に自殺したのであります。蓋し國家の損失之れより大なるものはありますまい。日本國には無數の個性があります。又無數の新しい個性が生じつゝあるのであります。かくの如く種々の異なつた個性の人民を抱合して餘裕のある國民が即ち大國民であります。私は他人の個性を尊敬することはやがてその國家に忠なる所以と思ひます。先達高島講師が心理學の講義で、教育家は兒童の心中に美質があるといふことを信じて之を尊敬しなければ眞の教育は出來ないといはれた通り、政治家も亦沖繩人の心中に美質があるといふことを信じて之を尊敬しなければ、眞の教化は出來ないだらうと思ひます。化される人がなづいて來ても、化す人が親しんでくれなければ教化の事業は決して實の擧るものでは御座いませぬ。教育社會の一部に於て見る如く、先生はこちらのものはつまらぬといひ、生徒は先生はけしからぬといふ風なことがあつては最早おしまひであります。先生は精神上の醫者であります。患者の病勢がひどければひどい程一入の同情が必要であります。自ら患者の身になつて、患者の痛みを己が身に感ずるやうな人でなければなりませぬ。勿論沖繩人には多くの缺點があります。しかもその缺點は同情を値すべきものであつて、輕蔑さるべきものではありませぬ。しかしながら以上申上げた所で、理性は或は承知することがあるとしましても、感情は容易に承知しないものであります。一體吾々人間は吾々の尤も自己と共通性を有すること夥多なりと感ずる人に對する行爲は共通性鮮少なりと感ずる人に對する行爲と自ら差異あるものなることは吾々の知る處であります。これは實に社會學上の事實でありまして、人種と人種とを識別し、同人種の中に於ても一府狹少なる人種的簇聚若くは政治的簇聚を識別するもので御座います。これは所謂同類意識といふもので、吾々が平常經驗する所の主觀的事實であります。他府縣人と沖繩人との間に打解けない點のあるのも之が爲であります。これは實に何でも

ない事でありますが、人間社會ではこの何んでもないことが却つて容易ならぬものでありますさうして此問題は二者の間の言語風俗習慣等の接近によつて解決されるのであります。二者の間の言語風俗習慣の漸次接近しつゝあるはやがてこの問題を解決しつゝあるのでありますが、二者の間に血緣を通ずる者の增加しつゝあるはこの問題の解決を一層速かならしむるものであります。この邊の所は教育諸君に十分研究して貰ひたい所であります。

それから近來爲政者や教育者が自らその功績を述立てることが流行しますが、それは被教育者の口で謳歌せらるべきものと存じます。よしや自分を滿足せしむべき謳歌の聲を聞かずとも、自分が養成した所の人物はとりもなほさず活ける勳章であるといふ丈けで滿足して貰ひ度いのであります。成程僅々三十餘年にして沖繩をこれまでに立派な沖繩にして載いたのは有難い沖繩人如何に健忘性なりとはいへども、忘れることの出來ない所であります。併しながら吾々の方にもかうなるべき個性があつたといふことを少しは言せて貰ひ度いのであります。爲政者や教育者が如何に偉くとも、沖繩人がアイヌや生蕃と同じ程度の人民であつたら、三十餘年にしてかういふ成績を見ることはとても出來ないだらうと存じますかつて米國人がアメリカの土人を劣等民族として輕蔑して取扱つた頃には、彼等の中から何等の人物も出なかつたさうですが、米國人が教育の方針を一變して、彼等を自分等の同胞としてその人格を尊敬して教育して以來彼等の中から學者も政治家も詩人も踵を接して出たとのことであります。これは臺灣の教育會に於て新渡戸博士がなされた演說の中にあつたので御座います。

終りに、鄕土の歷史は吾々に祖先より受けた所の遺傳と周圍より得た所の經驗とを以て如何にして世に立つ可きかを教え、又吾々を教化する人々に吾々の社會進化の過程を知らしむるのであると申したいので御座います。以上述べた事が双方の了解（アンダスタンディング）に資する所がありましたら甚だ幸に存じます。（沖繩新聞所載）

* * * * * * * *

琉球史の趨勢 終

羽地按司向象賢

今少相改度儀御座候得共國中に同心之者無御座悲歎之事に候知我者北方に一兩公御座候事(仕置)

具志頭親方蔡溫

譽れそしられや世の中の習ひ沙汰も無ぬ者の何役立ちゆが(琉歌)

宜灣朝保

野にすだく虫の聲々かまびすし
誰がきゝわきてしな定めせむ

附錄

文學士　伊波普猷氏著
琉球人種論　既刊
菊版　四十頁　定價二十錢

進化論より觀たる琉球の廢藩置縣

伊波普猷

沖繩在來の豚は小さいが、此頃舶來したパークシャーは大きい、しかし二者は至つて緣の近い方でその祖先はもと南支那に居たといふことである。同一の祖先から出た豚でも甲乙と相隔つた所にもつて行けば、地味や氣候の關係でそれから生れる豚の間に多少の相違が出來、なほ五代十代と時の經つにつれて變化するが、それに人間の力が加はるとその變化がもつと甚しくなる。さて範圍の廣い英國では多くある豚の中から理想的のものを選び出して之を繁殖の目的に用ゐ、その生んだ子の中から更に理想的のものを選び出して繁殖させたので、豚が次第々々に改良されて今日吾々が見るやうな大きなパークシャーとなつたが、範圍の狹い沖繩では飼養法が惡い上その繁殖方を唯老いぼれた種雄豚（アッチャーワー）に一任して置いたので、何時まで經つても改良されないで今日に至つたのである。沖繩でその他の動物の比

較的倭小な理由源因も亦こゝにあると思ふ。然らば沖繩人の體格はどんなものであらう。他府縣人に對して遜色があるかどうかは知らないのが、人種學上沖繩人の身長の平均數は他府縣人のそれよりも少し低いといふことになつてゐる。鳥居龍藏氏の調査によれば日本の男子の身長の平均數は一迷五九で、琉球の男子の身長の平均數は一迷五八であるといふことである。その理由原因は決して一通りに限つた譯では無く、種々の事情があつてさうなつたのであらうが、久しく絶海の孤島に住居してゐて、餘り、他の血液を混じなかつたことや、島内でも盛に血族結婚が行はれたことや、その他制度の上から來た習慣等のためにさうなつたのであらう。沖繩の中でも古來他人種が、餘計に入り込んだ那覇や、雌雄陶汰が盛に行はれた首里の城下には立派な體格の人が多い。所が明治十二年の廢藩置縣は退化の途を辿つてゐた沖繩人を再び進化の途に向はしめた。すなはちこの時以來内地人はどしどし沖繩に這入つて來る、沖繩人はそろ〳〵内地へ出て行く、士族は田舍へ下つて行く、田舍人は都會に集つて來るといふ樣に沖繩がかきまぜられた。さうすると自然と雜婚が始まり、雌雄陶汰が行はれる、段々と理想的體格の子の生れるのは當然のことである。實に舊制度の破壞と共に永い間の壓迫が取去られたので、今まで縮んで居た沖繩人は延び始めたのである。三十年前に比べると沖繩人の身長の平均數は確かに增してゐるに相違ない。生物學者の實驗によれば、一個の單細胞が分裂して幾千かの細胞が增殖すると、次第に其形も小さくなり、其勢力も弱くなり、はじめには活潑に運動してゐた所のものが漸々不活潑となり、なほその儘に打つ遣つて置けば周圍には充分の食物があるとしても終には多く分裂したものが全く死滅して了ふ。所が斯く微弱となつたものでも、もし其時代の細胞より分裂し來つたものに合はすことが出來れば、彼等双方のものは直ちに接合して双方に於ける組織成分を交換し、再び分れて舊に復し、その各が活潑に運動し、はじめの如くまた盛に分裂增殖の作用を營むことが出來るといふことである。さうして松本文三郎博士は之から推論して、原始細胞は一定の度迄は自發的に生殖の力を有することが出來るがそれより以上は必ず他種異性のものと合しなければ、生殖の作用を營むことが出來ぬ、そして若し他種のものと合すれば此に其生殖の能力を得て、能く子孫を造ることが出來、單細胞のものにあつては之によつて一定の時期の間、其作用を

持續する、一定の時期は經過して一定の子孫が生ずれば再び其勢力は枯涸して、又他種のものと合する必要が起るのであるが、多細胞のものにあつては斷えず他種のものに合することを要する、兎に角他種のものと合するといふことが勢力の微弱なる細胞に取つて其勢力を恢復せしむる原因となるのであると言はれてゐる此に由て之を觀れば明治十二年の廢藩置縣は微弱となつてゐた沖繩人を改造するの好時期であつたのである。思想上に於ても亦同じ現象が見られる。數百年來朱子學に中毒してゐた沖繩人は急に多くの思想に接した。即ち活きた佛教に接し、陽明學に接し、基督教に接し、自然主義に接し、其他幾多の新思想に接した。これはた賀すべき現象ではあるまいか。かく多くの思想に接して今後の沖繩が今迄に見ることの出來なかつた個人を產出すべきはわかりきつたことである。今日となつて考へて見ると、舊琉球王國は確に營養不良であつた。して見ると半死の琉球王國が破壞されて、琉球民族が蘇生したのは寧ろ喜ぶべきことである。我々は此點に於て廢藩置縣を觀迎し、明治政府を謳歌する。

兎に角廢藩置縣は琉球社會發達史上の一大時期である。自分は今この時期以前の沖繩の社會を生物學上の事實と比較して說明してみよう。海岸へ行つて、岸石棒杭等の表面を見ると、フヂツボといふ具の樣なものが一面に附着してゐる。此動物は解部上發生上からいへば確かに蝦や蟹と同しく甲殼類に屬するが、蝦や蟹が活潑に運動して餌を探し廻る中に交つて此奴だけは岩などに固着して一生涯動くこともなく餌の口に這入るのを待つて居る。足もなければ眼もない、外から見ると一枚の貝殼を被たつやうであるから、蝦や蟹の如く足や眼があつて巧に運動するものに比較して通例フヂツボを退化したものと見做すが、其境遇に於ける生存に適するといふ點では決して蝦や蟹に劣るものではない。海岸の岸石の表面に無數に生活して居るのは、軈て其處の生活に適して居る證據である。此奴等は兎に角丈夫に固着してゐる故、浪が烈しく岩に打當てゝも離れる虞が無く。隨つて岩に打付けられる樣な恐れも無い、此奴足も無い眼もないものではあるが、蝦や蟹が、如何に運動感覺の器官が發達してゐても、此場所では之と競爭は出來ぬ。(丘博士進化論講話中の例)これは實に過去の琉球を說明するに相應しい例である。明治十二年前の沖繩人は恰もこのフヂツボのやうなものであつた(今なほさうであるかも知れぬ)

實に沖繩人は慶長十四年島津氏に征服されて以來、この政治的壓迫の強い處で安全に生存する爲に、その天禀の性質を失つて意氣地ない者に成り了つたのである。活氣の少い朱子學が盛に行はれて、諸子百家の書や活氣ある宗教が禁ぜられたのは專ら沖繩人の生存上の必要からであつた。此處では少々くしてはいけないといふことはやがて自滅をすゝめることになる。世界の中で如何に強い武士も此場では扇子一本を持つた沖繩人と競爭は出來ぬ。このフヂツボ的社會組織は斯ういふ境遇には最も適當なるものであつた。現今沖繩人が沖繩群島に五十萬といふ程盛に生活してゐるのは即ち其處の生活に適してゐた證據である。風波の荒い所では誰が何と言つても無言で現位地にかぢりつくに限る。(沖繩群島の樣な風の強い所には高く天にまで舞ひ昇る樣な雲雀は一羽も翱翔してゐない)假りに沖繩人に扇子の代りに日本刀を與へ、朱子學の代りに陽明學を教へたとしたらどうであつたらう。幾多の大鹽中齋が躍出して琉球政府の役人はしば〳〵腰を抜かしたに相違ない。そして廢藩置縣も風變りな結果を告げたに相違ない。世の中では通例優つた者が勝ち、劣つた者が敗れるといふが、優勝劣敗といつても我々が優者と見做す者が何時も必ず勝ち、劣者と見做す者が敗れるとも限らぬ。たゞその場合に於て生存に適する者が生存する。それは兎に角廢藩置縣で、政治的壓迫は取去られたが、沖繩人は浪が打當てなくなつた岸上のフヂツボのやうに困つた。そして三十年も經つて足が生え眼が明いても、なほ不自由を感ぜざるを得ない。思ふにかういふ三百年間の壓迫に馴れた人民には意志の教育が何よりも必要であらう。意志教育なるかな。これ亦沖繩教育家の研究を値すべき大問題である。(沖繩新聞所載、四十二年十二月十二日)

宜灣朝保

古の人にまさりてうれしきは
この大御代にあへるなりけり

琉球史の趨勢附錄　終

豫告！

文學士　伊波普猷氏
眞境名安興氏　共著

琉球諸島の文學　近刊

菊版　六十頁餘

明治四十四年七月十日印刷
明治四十四年七月十五日發行

實價金貳拾錢

著作權所有

著者　伊波普猷

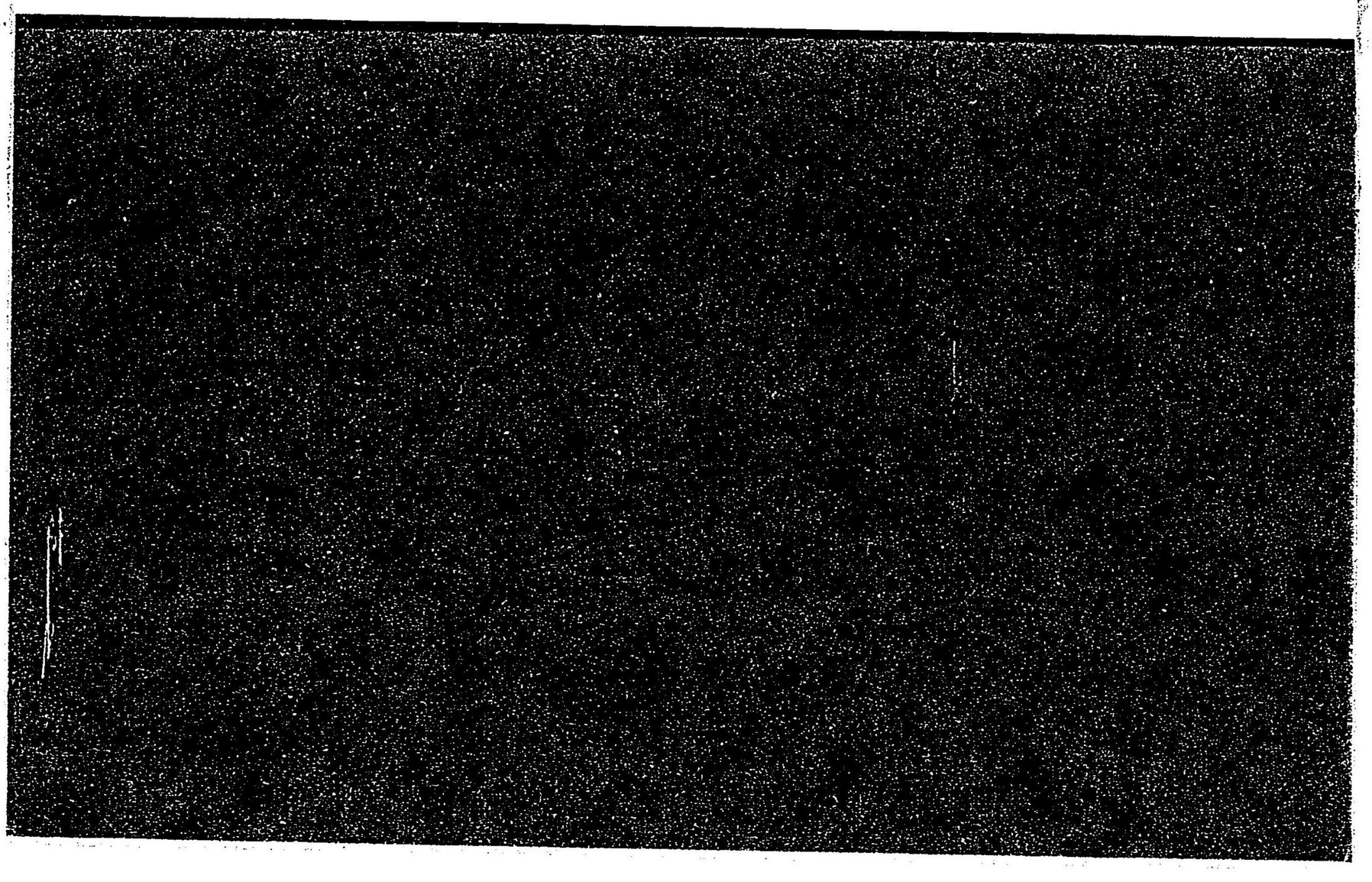
發行者　沖縄縣那覇區久茂地二三七八番地　小澤朝藏

印刷人　東京市京橋區弓町二十四番地　油出榮三

印刷所　東京市京橋區弓町二十四番地　三協印刷株式會社

527
523

I-4-5-M-68



327
523

琉球史の趨勢

伊波普猷

国立国会図書館

026350-000-1

327-523

琉球史の趨勢

伊波　普猷／著

M44

ADC-4136